

肉う労働運動路線を更に強力に飛させよう



1988.1.8 No. 2735

第二の産業報国会 II 鉄道労連・全民労連と対決しよう!

竹下に「抱擁」される全民労連

昨年、十一月二十日、全日本民間労働組合連合会が鳴物入りで発足した。現場の労働者の冷やかな反応とは対象的に、新首相・竹下が思わず口走った「抱擁をもって……」なるコメントに代表されるように、政府・自民党・全労連は、結成直後、はしなくも、その正体をさらけ出してしまった。そもそも全民労連とは、労働戦線の「統一」に名をかりた日本の戦略的基幹産業の大企業御用組合の「連合」に他ならない。そして、その路線は、「階級的労働運動の否定―根絶」「安保・自衛隊・原発の容認」「生産性向上運動の推進」「春闘放棄」「国際自由労連一括加盟」であり、実践的には、まがりなりにも「平和と民主主義」を旗じるしに戦後の日本労働運動を体現してきた総評労働運動の解体・一掃にある。

産業報国会への転落は必然

こうした路線は、現下の「円高・ドル安」「株式市場の大暴落」に象徴される支配体制の破局的危機の進行のもとで、単なる「労資協調」で済む筈はなく、ただちに大企業のなかで始まっているように、資本と一体となって労働者に賃下げ、首切りを強制する労働

組合ならざる「労働組合」となることは必然である。そればかりか政府・自民党の軍事大国化・改憲攻撃を積極的に推進する「自民党を支持する労働運動」「日の丸労働運動」つまり第二の産業報国会の道をたどることもまた必然である。

このことは、「戦後政治の総決算」を呼号する中曽根内閣の登場と軌を一にして全民労協が結成されたことと、手段を選ばぬ国鉄分割・民営化攻撃の「どくどく」国鉄と読みとることマルを主導勢力とする鉄道労連の誕生とその実態は、「明日の全民労連」を先取りしたものである。

原点に帰り、労働者の力に

依拠した大衆的闘いを!

従って、全民労連は、組織・未組織を問わず、圧倒的多数の労働者との対立・矛盾を激化せざるを得ず、いまこうした逆流に抗し、「全民労連打倒」を決意する全国で苦闘する無数の戦闘的労働者の新たな闘いへの胎動が開始されつつある。

まさに、一九九〇年（総評解散し「全統統一」）にむけて日本労働運動は、最大の試練と大激動過程に突入したといっても過言ではない。

いま、問われていることは、「右翼労働統一反対」「全民労連反対」を口先で唱え、没主体的な組合わせなどによりつつをぬかすことではなく、自らの民同的体質を脱却し、労働運動の原点

団 結 旗 び ら き

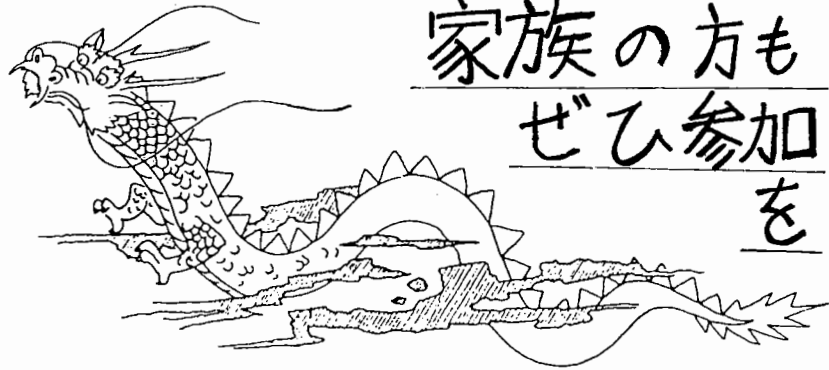
日時 88年1月16日 13時から

場所 労働者福祉センター・大ホール

第一部 中野委員長あいさつ、その他

第二部 アトラクション、カラオケなど

家族の方もぜひ参加を



「銃後も戦地だ」と拳国一致を掲げた産業報国会のポスター

（婦人民主クラブ）一月一日号での中野委員長の提起・無断で転載させていただけました）

に立ちかえり、労働者の力に依拠し、確信をもって、大衆的闘いを貫徹することである。いわんや、敵の攻撃に屈服し、小集団活動を率先して担ったり、鉄道労連との闘いを放棄し、そのくせ自らのセクト的利害のためのみ、言葉だけを遊ぶ、日本共産党・革同などは論外である。動労千葉は、国鉄分割・民営化粉砕を掲げ、二波にわたるストライキを敢行した矜持にかけて、鉄道労連解体を